



Title	ナショナリズムをめぐる社会問題の実証研究
Author(s)	齋藤, 僅介
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/87791">https://hdl.handle.net/11094/87791</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名（齋藤僚介）	
論文題名	ナショナリズムをめぐる社会問題の実証研究
論文内容の要旨	
<p>本稿では、現代日本における排外主義的集合行為という社会問題を取り上げ、なぜ今ナショナリズムをめぐる社会問題が発生したのかについて計量的に検討するものである。ナショナリズムが現代的な問題として目立ち始めてきていることは、「在日特權を許さない市民の会」（在特会）やD・トランプの大統領就任などの事例からも確認される。本稿では、このような現象に対して、ナショナリズムの類型とそれら類型ごとの排外主義的集合行為への参加のミクロなメカニズムに着目することによって、発生のメカニズムを明らかにすることを試みる。これまでの研究では、ナショナリズムの類型とミクロマクロリンクによって表現されるメカニズム的な説明の視座を組み合わせて排外主義的集合行為の発生があまり検討されてこなかった。つまり、本稿の扱うイシューに対してマクロな関連に対するミクロな基盤を持たない議論と実証が多くなってきた。</p> <p>序章では、本稿が問題とするナショナリズムをめぐる社会問題である排外主義的集合行為に対して類型的なアプローチをとる必要性を主張する。続く第1章では、社会学において論じられてきた現代日本を対象としたナショナリズムをめぐるマクロな議論を紹介する。また、以上の議論は欧米を中心に検討されてきた問題であることを確認する。その上で、論じられてきたナショナリズムをめぐる問題をミクロマクロリンクの中で位置づける必要性を確認する。さらに、その中でナショナリズムを類型化する必要性が、現代社会論、ナショナリズム研究、社会的なメカニズムを検討する研究それぞれにとって存在することを主張する。最後に、「いかなるマクロな条件とミクロな条件が整った時、どのようなナショナリズムの持ち主が排外主義的集合行為に参加するのか」という問い合わせを明示する。</p> <p>続く第2章では、ナショナリズムそれ自体の計量的な分析を行う。ここでは、リベラル・ナショナリズム論に依拠し、ナショナリズムを潜在クラス分析によって類型化し、それぞれのナショナリズムの特徴を記述する。現代日本には、一定の規模以上のナショナリズムの類型として、リベラル・ナショナリズムといえるようなナショナリズムは存在しないことが示される。さらに、欧米で明らかにされたのと同様に排外主義的ナショナリズムといえども2種類存在することが明らかとなった。一方をウルトラ・ナショナリズム、もう一方をエスニック・ナショナリズムと呼ぶこととした。第3章では、ナショナリズムと排外主義的集合行為への参加についての理論を議論する。ここでは、合理的選択理論を基礎とする社会運動の理論である2009年のK. Oppの理論に依拠する。その理論から、ナショナリズムを、参加の選択的誘因として捉える。一方、ナショナリストに対して、集合行為へのフレーミングの重要性を確認し、Oppのフレーミング理論へのバランス理論の応用方法が、排外主義的集合行為にとっても有用であることを主張し、その理論の彫琢を行う。第4章では、「在特会」の運動やネット右翼の活動において重要な役割を果たしたデマについて、それがどのような社会的な条件のもとでフレーミングされるのかを第3章の理論に基づき検討する。その結果、デマがフレーミングされるには、2つの社会的な条件が整う必要があることを明らかにした。第5章では、それぞれのナショナリストがなによつてフレーミングされているのかを検討する。排外主義的ナショナリズムの中でも、ウルトラ・ナショナリズムは権利問題によって、エスニック・ナショナリズムは嫌韓によってフレーミングされていることがわかった。第6章では、ナショナリズムの類型とインターネット上の政治的情報発信行動の関係について検討した。分析の結果、インターネット上の政治的情報発信行動に対してウルトラ・ナショナリズムと正義感の正の交互作用効果があった。5章の結果と合わせて、権利問題によるフレーミングが正義感を活性化したことが示唆される。第7章では、これまでにも注目してきた経済的な状況の認知とナショナリズムの類型の関係についてパネルデータを用いた固定効果モデルによって検討した。分析の結果、自らの経済状況への低評価によって、エスニック・ナショナリズムになりやすく、ウルトラ・ナショナリズムになりやすいわけではないことがわかった。第8章では、これまで用いたナショナリズムの類型の時点間と個人内の変化を記述した。終章では、本稿の知見をまとめ、1章で提示したマクロな議論と比較し、ナショナリズムをめぐるマクロな議論を統合した。本稿の提示する排外主義的集合行為の発生の説明は、社会状況として、4章で示した2つの条件のいづれかが整っている場合に、ある一定のナショナリズムを持つ人々に対して権利問題に関するデマがフレーミングできた時に、正義感が活性化され、排外主義的集合行為に動員されるというものである。</p>	

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(齋藤僚介)		
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授 吉川徹	
	副査 教授 川端亮	
	副査 准教授 辻大介	

## 論文審査の結果の要旨

提出された学位審査論文において、齋藤僚介さんは、日本社会において近年目立ち始めた、極端なネット上の発言などの排外主義的集合行為を研究対象とし、ナショナリズムと排外主義、正義感などの心理的な要素との関係を識別し、不特定の(潜在的な)集団において、排外主義が集合行為としてアクティビズムしていくメカニズムについて計量的に明らかにしています。

論文前半においては、20世紀のファシズム研究や大衆社会論、集合行動論などに端を発した対象領域の学説の流れと研究の経緯が、緻密かつ正確に確認されています。そのうえで学説や現代日本社会における現象について、自らの理論的解釈を与えていき、それがミクロ・マクロ・リンクを描く本稿の研究枠組みへと構築されています。

中盤から後半の実証分析部分においてオリジナリティが高い点は、第一にこの分野で用いられてきた基軸論から大きなパラダイム転換を試み、潜在クラス分析による現代日本のナショナリズムの類型化を行ったことです。第二は、フレーミング理論を用いることで、ナショナリズムが排外主義的集合行為につながる輻輳した道筋を整理し、仮説をデータにより裏付けたことです。これは従来、コンストラクションとかアジェンダ・セッティングというような概念によって論じられてきた、集合行動の実際の方向性を左右する動きを、類型ごとに異なるミクロで複線的な経路として描く試みになっています。

上記は二点とも成功しているといえ、結果としてミクロ・マクロのリンクを構成する因果モデルが、社会理論と言いうるものとして成立しています。そして論文終盤においては、この理論が従来の日本社会におけるナショナリズムと排外主義的集合意識に関わる現象を説明しうるものであることが論じられます。

齋藤さんの研究は、若者論、運動論、社会心理学、社会意識論などが交錯する領域に展開されているのですが、現代日本のナショナリズム論としての立ち位置をしっかりと維持して、ブレることなく視野の広い社会学的議論の中に自らの研究を位置づけていることは、課程博士論文としての完成度を高いものにしています。同時に、社会調査データや実験的試行データを用いた、水準の高い多変量解析に依拠して、合理的選択理論の枠内で仮説の検証を行う姿勢も一貫しています。

これらの点から、本論文は大部でありながら、一貫性と統合性をもった社会学研究として成立していると評価することができます。途中の論理展開においては、論理が脆弱であったり、丁寧な論理を求められるべき箇所や、表現をさらにクリアにすることが可能な箇所も残されています。また現代日本社会ではなく過去の異なる時点、あるいは異なる社会での理論の成立の可否の検証も、今後の課題として残されています。しかし、これらは本論文の価値を大きく損なうものではないと判断されます。

主査、副査による論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定します。